

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）
平成22年度発生予察情報第6号を下記のとおり発表しましたので送付します。

平成22年度発生予報第6号（9月予報）

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成22年8月27日福岡管区気象台発表（単位：％）

要素	予報対象地域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	九州北部全域（含、山口県）	10	30	60
降水量	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30

2 発生予報の概要

作物	病虫害名	発生量		作物	病虫害名	発生量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
普通期 水 稲	穂いもち	やや少	少	茶	炭疽病	やや少	少
	紋枯病	やや少	やや少		かざりたに	並	並
	ヒレウカ	やや多	やや少		チャノカモノヅメ	やや少	やや少
	カメムシ類	並	少		チャハマキ	並	やや多
大豆	ハモトウ	並	並		チャノホソガ	やや少	並
	カメムシ類	並	やや少		チャノアザミ	並	並
かんき	かいよう病	やや少	並		チャノミドリメコバエ	並	少
	黒点病	並	やや多		クワシカガラムシ	並	並
	ミカンハダニ	並	やや少	ナ シ	黒星病	並	並
	チャノアザミ	並	やや少		うどんこ病	並	並
	炭疽病	並	並		ハダニ類	やや少	並
カ キ	炭疽病	並	並	果樹全般	果樹カミシ類	やや多	並

作 物	病害虫名	発 生 量		作 物	病害虫名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
夏秋 トマト (高冷地)	葉かび病	並	やや多	夏秋 果菜類	コナジラミ類	並	並
	すすかび病	やや多	やや多		アザミウマ類	並	やや少
	灰色かび病	やや少	やや少	冬春 果菜類	外コナジラミ	-	並
夏秋 ナス (平坦地)	すすかび病	並	並		ミミキロアザミウマ	並	やや少
	うどんこ病	やや少	やや少	イチゴ	ハダニ類	やや少	やや少
イチゴ (育苗床)	炭疽病	並	並	夏秋 キャベツ (高冷地)	コナガ	やや少	並
	うどんこ病	やや多	並				
夏秋 キャベツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病、 軟腐病等)	やや少	やや少	野菜全般	ハスモンヨトウ	並	並
					オオタバコガ	並	並

3 予想発生量、発生時期、根拠、対策等

イネ（普通期）

1) 穂いもち

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、穂いもちの発病株率は1.4%（平年5.0%）と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の穂いもちの発生は並～少発生であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 晩期水稻において、上位葉に病斑が見られるほ場では、穂ばらみ期から穂揃い期にかけて防除を行う。

2) 紋枯病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病は認められず、平年比少発生であった(平年の発病株率2.5%)。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生はやや多～少と地域により差があった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 晩期水稻において、穂ばらみ期の発病株率が要防除水準（発病株率20%）に達した場合は、粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除する。普通期水稻においても、上位葉鞘へ病斑が伸展している場合は防除する。

3) トビイロウンカ

(1) 発生量：やや多

- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、1株当たりの寄生頭数0.1頭(平成0.1頭)と平成並であった。
イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや多～少であった。
ウ 生産環境研究所(合志市)における8月12日現在の払い落とし調査(無防除田)では、一株当たりの成幼虫数が1.7頭(昨年8.4頭、一昨年0.0頭)と要防除水準(8月中～下旬:1頭/株)を超えており、昨年比少、一昨年比やや多であった。
エ 気象予報によると、9月の気温は平成より高く、トビイロウンカの増殖に好適な条件となる予想である。
- (3) 対策 **ア 防除にあたっては、平成22年8月23日付技術情報第11号を参考にする。**
イ 飛来量は地域やほ場あるいは移植時期で異なるため、ほ場での発生状況を定期的に確認し、要防除水準に達したら直ちに防除を行う(要防除水準:収穫30日前で株当たり3頭)。
ウ 出穂以降の防除は株元への到達度が劣るので、粉剤及び液剤で防除する際は株元へ付着するよう丁寧に行う。

4) カメムシ類

- (1) 発生量: 並
- (2) 根拠 ア 生産環境研究所(合志市)の予察灯調査では、8月第1半旬～4半旬の斑点米カメムシの誘殺数は、アカスジカスミカメが323頭(平成388.2頭)、クモヘリカメムシが3頭(平成13.1頭)、ミナミアオカメムシが14頭(平成37.5頭)、アオクサカメムシが60頭(平成82.5頭)と平成並かやや少なかった。
イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成並～やや少であった。
ウ 気象予報によると、9月の気温は高く、降水量は平成並の予想で、発生に好適な条件である。
- (3) 対策 ア 常発地帯では、穂揃い期とその7日～10日後の2回防除を行う。
イ イネ科雑草(エノコログサ、ヒエ類、メヒシバ)が繁茂し出穂している休耕地等が近くにある場合には、被害を受けやすいので本田の発生状況に注意する。なお、出穂期以降に周辺の除草を行うと、雑草から水田へ飛来し被害を助長することがあるので、除草は控える。

大豆

1) ハスモンヨトウ

- (1) 発生量: 並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、10株当たりの幼虫数3.5頭(平成11.7頭)、100株当たりの白変葉数1.4株(平成2.12株)と平成比やや少の発生であった。
イ フェロモントラップによる8月第1～4半旬の誘殺数は、高原農業研究所(阿蘇市)が1125頭(平成872頭)、い業研究所(八代市)が948頭(平成724頭)で平成比やや多、生産環境研究所(合志市)が971頭(平成1007頭)で平成並、阿蘇市波野が87頭(平成164頭)で平成比やや少、山都町鶴底が47頭(平成233頭)で平成比少であった。
ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや多～やや少と地域によって差が見られた。
エ 気象予報によると、9月の気温は高く、降水量は平成並の予想で、発生に好適な条件である。
- (3) 対策 ア 初期の食害発生に注意するとともに、白変葉(若齢幼虫の集団食害による白色化した被害葉)が認められたら防除を行う。なお、ほ場によって発生状況が違いため、防除適期を逃がさないようにほ場をよく見回り、発生を認めたら早めの防除に心がける。
イ 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、防除効果の高い若齢幼虫

期に防除を行う。

ウ 8月に発生が少なかったほ場でも、9月に入り急激に多発することがあるので今後の発生に注意する。

2) カメムシ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生は認められず、平年比やや少の発生であった(平年 0.41 頭 / 10 株)。

イ 生産環境研究所(合志市)の予察灯調査では、8月の誘殺数は、ミナミアオカメムシの誘殺数 14 頭(平年 37.5 頭)、アオクサカメムシは 60 頭(平年 82.5 頭)と平年比やや少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は高く、降水量は平年並の予想で、発生に好適な条件である。

(3) 対策 ア 少発生でも被害が大きいため、開花終期～子実肥大期にかけて防除を行う。

イ カメムシ類の発生は、ほ場間差が大きく、近隣に発生が確認されなくても多発することがあるので注意する。

茶

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉は 3.8 葉 / m² (平年 7.3 葉 / m²) と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～やや少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 常発地では、摘採残葉の発病状況に注意するとともに、秋期の発生は翌春一番茶の収量・品質に及ぼす影響が大きいため、萌芽～3葉期に防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) カンザワハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率 0.5 % (平年 2.8 %) と平年比少の発生であった。

イ 茶業研究所(御船町)の8月5半旬の調査では、寄生頭数 1 頭(平年 2.9 頭)と平年比やや少の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 9月は、好適な条件が続くと多発することもあるので、茶園をよく観察し発生初期の防除を心がける。

イ 本虫の経済的被害許容水準は、卵、幼虫または成虫の寄生葉率 20 % 以下である。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

3) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発生を認めず平年比少の発生であった(平年の被害葉数 1.3 葉 / m²)。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップによる調査では8月1～5半旬までに 21 頭(平年 106 頭)と平年比少の誘殺数であった。

ウ 茶業研究所（御船町）のフェロモントラップによる調査では 8 月 1 ～ 4 半旬までに 79 頭（平年 72.3 頭）と平年並の誘殺数であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比やや少であった。

オ 気象予報によると、9 月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

（ 3 ）対策 ア 秋芽の被害を軽減するため、萌芽前に若齢幼虫を対象に防除する。

4) チャハマキ

（ 1 ）発生量：並

（ 2 ）根拠 ア 8 月の巡回調査では、被害葉数 1.1 葉 / m²（平年 0.1 葉 / m²）と平年比多の発生であった。

イ 生産環境研究所（合志市）のフェロモントラップによる調査では 8 月 1 ～ 4 半旬に 11 頭（平年 17.6 頭）と平年比やや少の誘殺数であった。

ウ 茶業研究所（御船町）のフェロモントラップによる調査では 8 月 1 ～ 5 半旬に 15 頭（平年 28.3 頭）と平年比やや少の誘殺数であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比少であった。

オ 気象予報によると、9 月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

（ 3 ）対策 ア 秋芽の被害を軽減するため、萌芽前に若齢幼虫を対象に防除する。

5) チャノホソガ

（ 1 ）発生量：やや少

（ 2 ）根拠 ア 8 月の巡回調査では、発生を認めず平年比やや少の発生であった（平年の被害葉数 2.6 葉 / m²）。

イ 生産環境研究所（合志市）のフェロモントラップによる調査では、7 月 6 半旬に 851 頭（平年 16 頭）と発生のピークを認め、8 月 1 ～ 4 半旬までに 302 頭（平年 91.0 頭）と平年比多の誘殺数であった。

ウ 茶業研究所（御船町）のフェロモントラップによる調査では、8 月 1 ～ 5 半旬までに 1,111 頭（平年 6832 頭）と平年比多の誘殺数であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比やや少～少であった。

オ 気象予報によると、9 月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

（ 3 ）対策 ア 産卵は新葉にのみ行われるので、三角葉巻前の秋芽萌芽期に防除する。

6) チャノキイロアザミウマ

（ 1 ）発生量：並

（ 2 ）根拠 ア 8 月の巡回調査では、寄生葉率 3.3 %（平年 2.3 %）と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所（合志市）の粘着トラップ調査では、8 月 1 ～ 4 半旬までに 1 頭（平年 33.8 頭）と平年比少の発生であった。

ウ 茶業研究所（御船町）のたたき落とし調査では、8 月 1 ～ 5 半旬までに 146 頭（平年 172.5 頭）と平年比やや多の発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比やや多であった。

オ 気象予報によると、9 月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

（ 3 ）対策 ア 加害は新葉のみ行われるので、秋芽萌芽期に防除する。

イ 中切り等の更新園、摘採中止園などでは、茶芽生育期間が長く、長期にわたり被害を受けやすいので、残効の長い薬剤（合成ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド剤）で防除する。

7) チャノミドリヒメヨコバイ

（ 1 ）発生量：並

（ 2 ）根拠 ア 8 月の巡回調査では、寄生葉率 3.3 %（平年 2.0 %）と平年並の発生であった。

イ 茶業研究所（御船町）のたたき落とし調査では、8月1～4半旬までに99頭（平年7.5頭）と平年比多の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 新芽を加害するので、萌芽～1葉期に防除を行う。

イ 発生時期が重なるチャノホソガ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。

8）クワシロカイガラムシ

（1）発生量： 並

（2）根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生株率3.1%であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、平年並の発生であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 防除適期は、卵塊全体の60～80%になった時期（ふ化最盛期）である。

イ アメダス地点の温度データを利用した有効積算温度シミュレーションによる第3世代ふ化最盛日は、鹿北(9月25日)、菊池(9月17日)、甲佐(9月17日)、水俣(9月9日)、上(9月17日)と予想された(8月23日現在の気象データから算出)。有効積算温度シミュレーションにて予測されるふ化最盛日は、熊本県病害虫防除所のwebページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」に情報を掲載。

ウ ふ化最盛期は、今後の気温により変動し、地域によってばらつきもあるので、ほ場をよく観察するとともに発生状況に注意して防除時期を判断する。

カンキツ

1）かいよう病

（1）発生量： やや少

（2）根拠 ア 8月の巡回調査では、早生・普通温州の春葉、果実とも発病を認めず平年比少の発生であった(平年の発病葉率3.7%、発病果率7.2%)。

イ 果樹研究所（宇城市）の無防除の甘夏における8月5半旬の調査では、発病葉率1.5%(平年6.0%)と平年比少の発生。果実は、発病果率32.0%(平年36.6%)と平年並の発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～やや少であった。

オ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 発病した葉・枝・果実が伝染源である。特に春葉の発病葉は、果実、夏秋梢への感染源となるので剪除する。

イ 夏秋梢のミカンハモグリガの食害痕に発生しやすいので、ミカンハモグリガを防除するか、夏秋梢を剪除する。

ウ 強風(風速毎秒6m以上)は病原菌の侵入門戸になる傷を作るので、防風ネット等の対策を講じる。

2）黒点病

（1）発生量： 並

（2）根拠 ア 8月の巡回調査では、発病果率1.6%(平年9.4%)と平年比少発生であった。

イ 果樹研究所（宇城市）の無防除の「興津早生」における8月5半旬の調査では、発病果率94.0%(平年92.4%)、発病度33.6(平年37.5)と平年並の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～並であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 直径 5 ~ 10 mmの枯枝は、保菌率が高く伝染源となりやすいので剪除する。

イ 前回散布から累積降水量 200 ~ 250 mmまたは 25 ~ 30 日経過したら薬剤を散布する。

3) ミカンハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率 4.8 % (平年 10.8 %) と平年比少の発生であった。

イ 果樹研究所(宇城市)における8月5半旬の調査では、寄生を認めず平年比少の発生であった(平年の寄生葉率 21.2 %、10 葉当たりの寄生頭数 8.9 頭)。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多~並であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 定期的に園を見回り、雌成虫の寄生葉率 30 ~ 40 %、10 葉当り 5 ~ 10 頭に達したら防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害果率 0.2 % (平年 3.7 %) と平年比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多~やや少であった。

ウ 果樹研究所が実施した熊本市河内町における粘着トラップ調査では、8月中旬に白浜、芳野は各3地点中1ヶ所で100頭以上、河内は3地点中1ヶ所で300頭以上が誘殺され、ほ場によって発生程度が異なったが、梅雨明け以降各地点とも世代数を重ねるごとに密度が高まっている。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 有効積算温度シミュレーションで予測される各アメダス地点の第7世代の発生ピーク(防除適期)は、熊本(9月2日)、三角(9月10日)、八代(9月5日)、水俣(9月8日)、本渡(9月13日)である(8月23日現在の気象データから算出)。

発生ピークは、今後の気温により変動し、地域によってばらつきもあるので、防除時期は、ほ場における発生状況を観察して判断する。

イ 果実洗浄法で調査し、要防除密度である 15 頭 / 100 果を越えた場合は防除する。

* 果実洗浄法

展着剤あるいは洗剤を 5,000 ~ 10,000 倍に薄めてコップやビーカーに入れ、液で果実(100 果)を洗い、洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペや実体顕微鏡で虫数を計数する。

ウ 有効積算温度シミュレーションにて予測される発生ピーク(最新の予測は、ホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」を参照。

ナシ

1) 黒星病

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉率 0.7 % (平年 0.6 %) と平年並の発生であった。
イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～並であった。
ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 9月以降に増加する秋型病斑は、葉の裏面に薄いスス状の病斑を形成する。鱗片に感染した場合、翌春の伝染源となるので、収穫後の防除を徹底する。

2) うどんこ病

- (1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病を認めず平年比やや少の発生であった(平年の発病葉率 0.9 %)。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 高温・乾燥が続くと多発しやすい。

イ 収穫期から収穫後に発生し、多発すると早期落葉により樹勢が低下するので、発生初期の防除に重点をおく。

3) ハダニ類

- (1) 発生量：やや少

- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率 0.3 % (平年 4.3 %) と平年比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 定期的に園を見回り、雌成虫の寄生葉率 20 % 以上、1 葉当り 1 ～ 2 頭に達したら防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

カキ

1) 炭疽病

- (1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉率 0.7 % (平年 0.3 %) と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 徒長枝の発病が多くなると果実の発病も多くなるので、発病した枝は園外に処分し、病原菌の密度を下げる。

イ 発病後の薬剤防除では効果が低いので、予防散布を徹底する。

果樹全般

1) カメムシ類

- (1) 発生量：やや多

- (2) 根拠 ア 県内 3 地点に設置した予察灯に誘殺された 8 月 1 ～ 5 半旬までのチャバナエオカメムシ数は、生産環境研究所(合志市)が 1,247 頭(平年 424 頭)、果樹研究所(宇城市)が 533 頭(平年 254 頭)、天草農業研究所(天草市)が 18,564 頭(平年 3,526 頭)と平年比多であった。

イ ツヤアオカメムシの誘殺数は、生産環境研究所(合志市)が 629 頭(平年 167 頭)、果樹研究所(宇城市)が 59 頭(平年 56 頭)、天草農業研究所(天草市)

が2,988頭(平成1,759頭)と生産環境研究所、天草農業研究所で平成比多、果樹研究所で平成並であった。

ウ 県内3地点設置した予察灯では、チャバネアオカメムシが8月3～4半旬に、ツヤアオカメムシが8月1～4半旬に誘殺数のピークを認めたが、5半旬には両種とも減少した。

エ ヒノキ球果の口針鞘数は、8月16日に採取した県内5地点(熊本市河内町、宇城市(松橋、三角) 合志市、大津町) の平均値が9.3個、8月24日に採取した天草地域の5地点(本渡町、有明町、栖本町、新和町、苓北町) の平均値が15.5個で、離脱(樹園地への飛来) の目安となる口針鞘数1球果当たり25個に達した地点はなかった。

オ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや多～少であった。また、果実被害の報告はなかった。

(3) 対策 ア 口針鞘数は離脱の目安である25本に達していないが、予察灯の誘殺状況から活発にかつどうしていると考えられる。口針鞘数から予測される離脱時期は8月下旬から9月上旬であり発生には十分注意する。

イ カメムシ類の飛来時期や飛来量は地域差が大きい。また、局地的に飛来し加害する傾向があり、園内でも局在することがあるので、よく園内を見回り早期発見に努める。過去に集中加害のあった地域、園地では特に注意する。

ウ 果樹園への飛来や被害を確認したら、カメムシ類の活動時間である朝または夕方に薬剤を散布する。

エ 平成22年8月20日付技術情報第10号、生産環境研究所(合志市) 天草農業研究所(天草市) の予察灯・フェロモントラップの調査データおよびヒノキ球果の口針鞘調査結果は、ホームページ「<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>」を参照。

夏秋トマト(高冷地)

1) 葉かび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率11.3%(平成28.7%) で平成比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや多～少であった。

(3) 対策 ア **抵抗性品種でも発病には注意する。発病した場合は、早期に慣行の葉かび病対策を行う。県内では、葉かび病抵抗性遺伝子Cf-9を持つ品種に感染するレースが確認されている(平成22年1月7日付特殊報第1号参照)。**

イ 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

ウ 換気を良くし、過湿防止に努める。

エ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。

オ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) すずかび病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率48.7%(昨年の発病株率19.3%) で昨年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや多であった。

ウ 気象予報によると、9月の降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

- イ 換気を良くし、過湿防止に努める。
- ウ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。
- エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。
- オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

3) 灰色かび病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、葉の発病株率 8.7 % (平年 27.0 %) で平年比やや少の発生、果実では発病を認めず平年比やや少の発生であった。(平年の発病株率 2.1 %)。
 - イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比多～少であった。
 - ウ 気象予報によると、9月の降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去し、通風採光を良くする。
 - イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋ナス (平坦地)

1) すすかび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、1 ほ場で多発生し、発病株率 12.3 % (平年 7.1 %) で平年並の発生であった。
 - イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比少であった。
 - ウ 気象予報によると、9月の降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。
 - イ 換気を良くし、過湿防止に努める。
 - ウ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。
 - エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。
 - オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) うどんこ病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発生を認めず平年比やや少の発生であった。(平年の発病株率 1.6 %)。
 - イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比少であった。
- (3) 対策 ア 通風採光を良くする。
 - イ 不要な下葉はできるだけ除去する。
 - ウ 発病初期から薬剤散布を行う。

イチゴ (育苗床)

1) 炭疽病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発生を認めず平年比やや少の発生であった。(平年の発病株率 1.5 %)。
 - イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～並であった。
 - ウ 気象予報によると、9月の降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 育苗ポットの間隔は広めに取り、不要な下葉などは除去し通風採光を良くする。

- イ 罹病株があると降雨やかん水により急速に蔓延するので、定植時には発病していない健全な苗を定植し、また、ビニール被覆するまでは発生に特に注意し、被害茎葉や被害株は速やかに除去し処分する。
- ウ 次年度用の親株は、無病苗を選抜し、前年に発生の見られたほ場は親株床として使用しない。
- エ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努め、風雨の後は防除を徹底する。
- オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) うどんこ病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率 2.0 % (平年 0.7 %) と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並であった。

ウ 5～6月に多発傾向だったため、潜在感染している可能性が高い。

(3) 対策 ア 発病葉や潜在感染している可能性のある不要な下葉などを取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。

イ 定植前まで防除を徹底し、罹病株を本ばに持ち込まないようにする。また、定植後は活着後から開花期までの防除に重点を置く。

ウ 葉裏に発生するため、薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋キャベツ (高冷地)

1) 細菌性病害 (黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病)

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

イ 気象予報によると、9月の降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア ほ場の排水を良くする。

イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。

ウ 発病後の防除は困難であり台風や大雨の後に多発するので、予防散布および風雨後に薬剤を散布する。

野菜虫害

夏秋果菜類

1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率 17.7 % (平年 14.5 %) と平年並の発生、高冷地のトマトでは寄生葉率 15.7 % (平年 40.5 %) と平年比やや少の発生であった。コナジラミの種類は、平坦地のナスでは、全てタバココナジラミ、高冷地のトマトでは、ほとんどがオンシツコナジラミであった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生はキュウリおよびトマトで平年比やや多～並、ナスで平年並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア ほ場内および周辺の雑草は重要な増殖源となるので、除草する。

イ コナジラミ類に対する防除薬剤は、種によって効果が異なるものもあるので、種を見分け、適切な薬剤を散布する。

ウ 薬剤散布は、下位葉や葉裏など植物全体に十分かかるようにする。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行

う。

2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率 4.0 % (平年 4.2 %) と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生はキュウリ、ナスで平年並、メロンで平年比並～少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア **ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する。**

イ ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色の粘着トラップを設置し、早期発見に努める。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

エ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

冬春果菜類

1) タバココナジラミ

(1) 発生量：並 (前年比)

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率 17.7 % (前年 14.5 %) と前年並の発生であった。

イ 平坦地の野外のコナジラミ調査では、8月の誘殺数が前年比やや少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 別枠参照

2) ミナミキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率 4.0 % (平年 4.2 %) と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生はキュウリ、ナスで平年並、メロンで平年比並～少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 別枠参照

育苗期のコナジラミ類・アザミウマ類の防除対策！！

(1) 播種 10 日前までに育苗ハウス内・周囲の雑草を防除する。

(2) 育苗ハウスは本ぽと別に設け、ハウスの開口部 (サイド、換気部など) には必ず目合い 0.4mm 以下の防虫ネットで、天井部は近紫外線除去フィルムで被覆し害虫の侵入抑制を図る。

(3) ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。

(4) 定植 2 ～ 3 日前に、定植予定苗の株元に登録のある粒剤を処理する。

(5) 発病苗は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに施設外に持ち出し処分する。

(6) 野良生えは重要な伝染源となるので、徹底除去する。

(7) 栽培を終了したハウスは、密閉処理により地温を高め保毒虫の飛び出しを防止する。

イチゴ (育苗床)

1) ハダニ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発生を認めず(平成22.1%)で平成比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平成より高い予想である。

(3) 対策 ア **本ばでの発生は主に寄生苗の持ち込みによるものが多いため、定植前の防除を徹底する。**

イ 発生初期は下葉に寄生している。下葉かぎを行うことで、寄生葉が除去されるうえ、薬剤もかかりやすくなる。取り除いた下葉は、ほ場外に持ち出して処分する。

ウ イチゴのナミハダニは薬剤によって感受性が異なるため、平成21年7月17日付技術情報第5号 (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/H21/yosatsu/gijyutu090717.pdf>)等を参考に、薬剤防除の計画を立てる。

エ 葉裏に多く寄生しているため、薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋キャベツ(高冷地)

1) コナガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成並であった。

イ フェロモントラップによる8月第1～4半旬の誘殺数は、阿蘇市波野1頭(平成7頭)と山都町鶴底3頭(平成7頭)で平成比少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平成より高い予想である。

(3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早期発見、早期防除に努める。また、薬剤は幼虫が寄生している葉裏まで十分かかるよう、丁寧に散布する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

ウ 収穫残さは発生源となるので、直ちに処分する。

野菜全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、ナス、イチゴ、トマトともに発生を認めず、平成比やや少の発生であった(平成の寄生株率ナス1.0%、イチゴ0.8%、トマト0.1%)。

イ フェロモントラップによる8月第1～4半旬の誘殺数は、高原農業研究所(阿蘇市)が1125頭(平成872頭)、い業研究所(八代市)が948頭(平成724頭)で平成比やや多、生産環境研究所(合志市)が971頭(平成1007頭)で平成並、阿蘇市波野が87頭(平成164頭)で平成比やや少、山都町鶴底が47頭(平成233頭)で平成比少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生はナスで平成比やや多、トマトキャベツで平成並、イチゴで平成やや多～並であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平成より高い予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場をよく見回り早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるの

で注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

オ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、ナス、トマトでは発生は認めず、平年比やや少の発生であった(平年の寄生株率ナス0.5%、トマト0.1%)。

イ フェロモントラップによる8月第1～4半旬の誘殺数は、生産環境研究所(合志市)が91頭(平年127頭)、い業研究所(八代市)が2頭(平年14頭)、高原農業研究所(阿蘇市)が1頭(平年2頭)で平年比やや少、山都町鶴底が0頭(平年15頭)で平年比少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生はナスで平年比やや多、トマト、イチゴで平年並であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場をよく見回り早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

エ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行なうなど、危害防止に努めましょう。

詳しい内容等については

生産環境研究所病害虫研究室(病害虫防除所)(TEL:096-248-6490)にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。